

2009/2010 平成21年度



この年から設けられた中間報告会には、第3期生に加え、オーストラリアでラグビー武者修行に励む第2期生の山口真理恵選手等も参加。現地クラブチームで豪州代表選手たちとともにトレーニングに励む一方、州選抜チームに選出されたことなどを報告した

「しつこい(質濃い)サポート」が本格化。 四半期報告と年間成果報告に加え、 中間報告会を新たに実施。

「この財団の助成は、しつこいですよ。質が濃いです」——。スポーツチャレンジ助成の第3期生を迎える助成金贈呈式で、浅見俊雄審査委員長はチャレンジャーたちを前にこう話した。「皆さんの四半期報告には必ず私のコメントを添えて戻します。そこでもう一度自分の活動を見つめ直して、次のチャレンジにつなげていってください」。

しかし一方で、事務局に寄せられる報告書からは、当初の計画どおりに研究が進んでいないチャレンジャーや、記録が伸びずに思い悩むチャレンジャーの姿が見て取れた。その中には出場した大会の結果により次のステップに進めず、計画を変更せざるを得ないチャレンジャーも含まれていた。「助成期間の半期を終えたところで、直接、叱咤激励する機会をつくったらどうか」「互いに現状を報告し合うことで、チャレンジャー同士の刺激にもなるのではないか」。中間報告会の発想はこうして生まれていった。

初めての中間報告会には、第3期生に加えて数名の第2期生も参加して、審査委員に活動の中間報告を行った。台湾デフリンピックに出場した棒高跳の竹花康太郎選手は、「競技の途中で足をつってしまった。これまで試合中にこうしたトラブルを経験したことがなく、動揺してしまった」と振り返りながらも、「デフリンピック金メダリストの記録を抜く4m86cm」を新たな目標として掲げた。この年、竹花選手はデフリンピックでの活躍により厚生労働大臣賞を受賞している。

中間報告会は翌年度以降も継続され、目標達成に向けたチャレンジャーのPDCAにおいても重要な役割を担うようになった。「下半期の活動に向けて、自分自身の活動をあらためて整理する機会になった」というチャレンジャーの感想に加え、中間報告会を定例化することで「年度末の成果報告の質が高まった」(審査委員)といった効果も生み出していった。

8月の衆院選で民主党が過半数を獲得し政権交代が行われたこの年、前年の12月に施行された新公益法人法のもと、ヤマハ発動機スポーツ振興財団は公益財団法人として新たなスタートを切った。3月18日に認可を受けた公益財団法人の第1号(3団体)のうちの一つだった。一方、世界のスポーツシーンでは、ベルリンで行われた世界陸上の男子100m決勝で、ウサイン・ボルト選手が9秒58の世界新記録を樹立した。

スポーツチャレンジ助成事業

年度末のスポーツ・チャレンジ・ウィークを、ヤマハリゾートつま恋(静岡)に移して開催。またこの年から優れたチャレンジに贈られる「審査委員特別賞」と「特別チャレンジャー賞」を設けて表彰を行った。「審査委員特別賞」は該当なし、「特別チャレンジャー賞」にはラフティングの世界大会で準優勝したTHE RIVER FACEをはじめ、研究チャレンジャーの星川佳広氏、吉岡伸輔氏、増田和美氏の4件が選出された。



■平成21年度(第3期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	46件	15件	1,113万円
研究助成	74件	11件	1,695万円
奨学生	17件	5件	600万円(1年分)
計	137件	31件	3,408万円

スポーツ振興支援事業

■ジュニアヨットスクール葉山

セーリングスポーツの振興を促進するために、ジュニアヨットスクール葉山の模範スクール化に取り組んだ。その第一歩として、スクール生(個人の努力)、保護者(共感・協力)、指導者(人格形成)のスタンスを明確にするとともに、「セーリングへの興味 習慣化」「スポーツ基礎力の向上」「思考力の向上」「応用力の向上」「総合力の向上」と5つのステップを設け、スクール生のさらなる成長のためのプログラムづくりに着手した。

■セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

清水ヨットスポーツ少年団など初参加の5クラブを含め、全国から22クラブ・102選手が参加。またセーリングスポーツの強豪国ニュージーランドから選手と指導者4名を招待して国際交流を図った。合わせて、ジュニア/ユースナショナルチームの榮楽洋光強化コーチと北京オリンピック代表の飯島洋一選手を招いて勉強会を開き、レース映像等を使った指導を行った。

■スポーツ教材の提供

新学習指導要領により体育教育の現場が活発化したことで、前年度の約3倍となる588件の申請があった。抽選により提供先50団体を決定し、スポーツ教材を使った活動事例をホームページで紹介する試みも開始した。



■全国児童 水辺の風景画コンテスト

「水辺への興味・関心の拡大」と「子どもたちの感性の発露、可能性の拡大」というコンテストの意義を再訴求した結果、全国から5,166点の作品が寄せられた。各審査員からは「全体の作品レベルが向上した」という感想が聞かれ、工藤和男審査委員長も講評の中で「体験をもとにした、元気でいきいきとした作品が増えた」という印象を語った。

スポーツ文化・啓発事業

■第2回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞



【功労賞】 塚越 克己 氏
日本のスポーツ医・科学の発展を牽引した「緑の下の力持ち」



【奨励賞】 増田 雄一 氏
トップレベルのサポート技術を一般レベルに拡大する取り組み